

「名声」(みょうしょう)

題材法話

○わたくしのお念仏
法輪寺本堂修復の関
年越しとなつてしま
たが、梅鶯仏壮の報
ともにお勤めさせて
した。お釈迦様の教
弥陀仏のみ教えを、
ないものとして私達
て下さったのが親鸞
あります。その親鸞
ら、改めまして念仏
に出会わさせて頂い
を悦び、子や孫へと
ていくことを誓ひ合
報恩講であります。
つ南無阿弥陀仏のみ
教壮年会におきまし
さまで頂いておち味
さして頂いておち味
やはり「なぜ私達に
阿弥陀仏でないかと
か」「南無阿弥陀仏
と救われぬのか」と
ことが大事なこと
であります。
「どんな教えでも
も行き着くところ
は同じで、救われ

どれも結局一緒なんだ
どと思つてゐる内は、
いのちの問題はまだ人
ないのです。この私の
なこのです。この私の
という、考えるならば、
ととして考えなれば、
んな教えも一緒など、
のんびり構えてなんか
れないはずで。なにか
かなが救われるのは、
なつてくると聞法の姿
います。○拝むわしが
今私達は「私が救われ
のは浄土真宗しかなく
の思いでみ教えを聞か
ていたでみ教えを聞か
真宗でなければならな
との理由の一つに「撰
捨」という阿弥陀様の
があり。普通、たのみ
とき、たのみごとをす
「どうかよろしく」と
いをするのです。が、
南無阿弥陀仏の世が、
界では、たのまれの
る側の阿弥陀さま
の方が「どうかた

のんでくれよ、任せて
の「と願つておつて下
のです。たのむ前に、
おつたのがこの私だ
です。○しかもたのま
「撰取不捨」だと、誓
おつて下さるのです。
め取つたら二度と離さ
という事です。この私
まの呼び声が、阿弥陀
「さうでございまして
今、いままで願つてお
下さつたのです。それ
はどうかよろしくお願
ます」と全てを阿弥陀
に任せます。○この任
弥陀仏」と口からこぼ
るお念仏なのです。○
おさめ取り二度と捨て
けれども、本心に情け
いことに、そうお願い
ておきながら、「なま
ぶ」とお念仏を称
えておきながら、
平生はさつぱりそ
のことを忘れてし
まいがちなのも私

なのです。忘れられて
弥陀さまが悲しむよう
とばかり行つて、日暮
しを仕舞ひ行つて、凡
いわれるこの私の姿な
す。けれども、この私
すつかり忘れてしまつ
ても、阿弥陀さまの方
「ひとときも忘れんぞ
心配するなよ」と仰つ
さるのです。これが「
です。もしこれが、か
阿弥陀さんのことを忘
はいけないとの教えであ
たなら、私などは絶望
よう。私の方が忘れて
私の方が逃げまどつて
も、阿弥陀さんの方が
れない。離さない」と
て下さるのです。こ
こんな仏さまや神さま
、間違いなく他にはお
ません。阿弥陀様だけ
です。だからこそ私に
弥陀さまでしかだめ
なのです。次号へつづ
梅鶯仏壮報恩講
住職法話より